

「横浜の都市づくり」に提案する

『横浜の都市づくり』を

読んで



小此木彦三郎

1

先日、総務局のNさんが、自民党の控室に、「横浜の都市づくりー市民がつくる横浜の未来ー」というきれいな本をたずさえてやってこられ、「小此木さん、今週これは有隣堂でベストセラーの2位なんですよ。市長もわれわれも相当自信もっているのですが、一つこれを批評してくれませんか。と同時に、あなたの考えている横浜の未来像というものについて、大いに論じてくれませんか。」という申し入れがあった。

正直なところ、そのときまで、私はこの本のなかのきれいな写真や図表を散見していた位で、その文章をしみじみと読んでみるどころまで勉強していなかった。がとにかく、「結構です、やりましょう」と、気軽にひき受けてしまった。そこで横浜の未来像についての意見は、いずれ本会議で飛鳥田市長と十分論争することとして、とりあえず、この「横浜の都市づくり」についていろいろの角度からの感想をつづることにしたしだいである。

ところで飛鳥田市長は、この豪華な「横浜の都市づくり」の前に昨年も「市民生活白書」を発刊している。

前回の「市民生活白書」は、当時、朝日新聞の書評あたりで、なかなか好評をばくしたようで、装丁のセンスの良さといい、レイアウトのユニークなことといい、とてもお役所の出版物とは思われないほど、あか抜けしており、文化人市長の意気と感覚と体臭が、よくにじみでていて、さすがと感心させられた。

もっとも、230ページにのぼるぶあついもので、ほめてくれたマスコミが、はたしてその内容を十分消化したうえでの書評であったかどうか疑わしく、それと同時に、私自身通読してみて、たしかに労作であることは認めても、無理な作文的個性

が随所に見受けられたことは事実であり、とくに飛鳥田さんが、その序文で、「市民生活の正しい現状をつかむことは、市政の指針となり、それを市民に報告することで、市民が市政のあり方を考える材料となる」との意味をのべ、「市政決算書」と謳ってはいても、そのじつは、社会党の国会議員として活躍した経歴をもつ飛鳥田さんが時とところを変え、横浜市長の立場ではじめて市行政に没入してみて、飛鳥田さんなりに地方自治行政の実態を研究した結果の報告にすぎないものと思われた。

というのは、せっかくの労作ながら、今後の横浜市の問題点、その内容の解説に急であって、市政課題を把握のうえで、その解決方向を、たとえ、いとぐちだけでも示す努力に欠けていたということである。市民が市政のあり方を考える材料というより、むしろ、飛鳥田さん自身が市政を考える材料を手づくりしてみたと評すべき内容であった。

さて、今度の「横浜の都市づくり」は、そのゴージャスさにおいて、とても昨年の「市民生活白書」どころではないことにまず一驚する。装丁、レイアウト、編集ともに、奇抜華麗なること、とても前版の比ではない。Nさんのいうごとく、有隣堂のベストセラー<ほかの書店で売っているかどうかは知らないが>ということも、ある意味では当然で、そのできあがりぶりには改めて敬意を表せざるをえない。

しかし、最初にも申しあげたとおり、私も、かねがね、社会党の飛鳥田さん、横浜市長の飛鳥田さん、文化人の飛鳥田さん等々、種々の角度からのプリズムをとおしてみても、立場の違った自民党の市会議員としては、市長のこういう仕事——本がよくできた、できなかつたということは別として——に若干の意見ももちあわせているので、Nさんの要望にそえるかどうかははなはだ心もとな

いが、この機会を幸に、いささか所見をのべてみることにしたのである。

したがって、以下書きつづけることは、あくまでも私見であり、そしてそれが率直なあまり、かりに失礼な表現になる個所がでてくるとしてもそれは飛鳥田さん同様、市民のためになろう、横浜市を愛しようという私の気持の勇み足であって、いささかも他意ないことを、前もってお断りしておきたいのである。

2

前回の「市民生活白書」は、たしかA5版の規格だったが、こんどの「横浜の都市づくり」は、それよりも一段と大きいA4版である点、このごろ流行の美術書のように、一べつ、まさに瞠目に価する。さらに、なんどもいうように、なかなかしゃれた装丁、編集で、手にとって見たい、読みたいという気持をそそるに十分なできばえである。マスコミュニケーションとして、見たい、読みたいという魅力に富んでいなければ、たんなる飾物にすぎないとすれば、その意味でも、この本は一般刊行物としても上出来の部類と認めなければならぬまい。

しかし、ここで私が考えるのは、この本が公共出版物であるという点である。そして私のいいたいのは、公共出版物には、おのずから限界があるのではないかということである。上梓一番たちまちベストセラーとなり、巨億のもうけをたくらむ出版社ならば、斬新奇抜な着想、着眼をもって、いかなる豪華本を作成しようと勝手である。

しかし、飛鳥田市政になってから、昨年の予算市会で、「広報費」の削減修正となった経緯をかえりみると、横浜市政の広報活動の分野、限界というものが、どれだけのものであるか、これはおのずから常識をもって判断せねばならぬことであ

る。飛鳥田市長は、まことに清潔で、勤勉であるという評価には、私もつねに他にさきがけて賛意を表わしている。しかし、巷間、飛鳥田市政はアイデア乱発市政である、パンフレット市政である、コンサルタント市政である、また曰く、まれにみる有言不実行市政であるという多くの雑音的評価がとりざたされ、しかも、これらの評価が必ずしも射を射ていなくないと思われるとき、この限界の判断はきわめて重大である。

公共出版物の生命は、あくまでも正確な表現を欠いてはならぬということである。さらに、品位と格調を失ってはならず、また素朴で謙虚でなければならぬということでもある。さきの「市民生活白書」でも、また、今度の「横浜の都市づくり」でも、飛鳥田さんがつねに強調しているとおり、地方自治体の財政状態は、けっして道楽や趣味がいかされるほど豊かではないはずである。つまり、3割自治とはいえ、そのうちの2割ないし2割5分は人件費で消える財政規模である。年に1回の出版くらいというかも知れぬが、ぞくぞく豪華本がでるにすれば、あまりにもとぼしい横浜市単独事業費でしかないのが現状ではないか。有隣堂で発売していることは、あるいは当局の意図が「市民に売ってもとをとる」ことかも知れない。しかし、それほどばかげた話もあるまい。

市政の現状報告をかね、飛鳥田市長のビジョンをかかげるものなどを、本屋の店頭で発売すること自体、大きな誤りであると私は考える。

市政を率直にかたる市長の姿勢には、私は一市民としても、また市政の参画者の一人としても、満腔の好感を覚えずにはいられないけれども、その才気と文化趣味のあまり、出版を楽しんではゆきすぎというべきであろう。素朴に謙虚に、そして極力市費を節約する方法で、大いに横浜市政をたたってもらいたいものである。

また、とくにご忠告申しあげておきたいことは、この本の最後のページ <P71> —— われらの市政——の項に「……市民不在の都市から、市民のための人間性豊かな都市につくりかえねば永久にその機会を失なうことになるでしょう……」というのがあるが、一読、これは、まことに横浜市ならびに横浜市民を侮辱した文章である。市長自身のイデオロギーは、いかにもご自由であるが、横浜市の過去および現在を本当に「市民不在の都市」として認識しているのであるのか。もし、いささかでも、そのような認識が飛鳥田市長の腹蔵するところであれば、まことに、これは唯我独尊的暴挙であり、このような考え方が、私がたびたびいう、市会軽視、市民蔑視の考え方につながるのである。

さらに意見をつけ加えるならば、(1)巻頭言、(2)展望、(3)目標、(4)建設、の5項目の末尾ごとに、なにゆえ英文掲載の必要があるのかふしぎでならない。編集上の体裁もあるうが、市長がこのレポートの緒言で市民に対して「本書は、横浜の将来への目標と、そのすすめ方について示したものであります」という以上、これらの英文の必要性はいもく見当たらないのである。それとも、本書巻末の一節にあるごとく、本市を「市民不在の都市」とする感覚が、これらの多くの調査報告を、横浜市民にではなく、他の都市の市民に、あるいはまた、いずこかのエトランゼにでもかたるつもりであろうか。

3

このパンフレットの発刊主旨は「横浜の将来への目標……国際港都基幹計画によって昭和50年までの具体的な計画と、それを達成するための基本政策の提案……」であるとされている。

しかし率直に言って本書は、「社会科の教材」と

しては、なかなかぎわよくできているが、市民教育をどの市民層を対象として考えているのかまったく判断に苦しむ内容である。

さきにものべたとおり、 unnecessary 英文掲載もその一例であるが、元来、市民全体を対象とする広報活動をねらいとするならば、むずかしいことでもやさしく、わかりやすくのべることが肝心であろう。ところが、本書の記述は、それと似て非なるもので、言葉は平易であるが、なにかまわりくどい、むずかしい文章が目立つのである。記述のみでなく、難解な図表、突如として各節に現われる子供たちの顔のクローズアップ。市民がみな詩人のセンスをもちあわせているとでも思いこんでいるかのような叙事詩的文章、そして、奇態な新造語の羅列など、私にはどうしても素直な気持ちで読みきることができなかつたのである。

まづ、本書は、71ページのうち、26ページをさいて、都市づくりの目標と建設との導入的解説について、細部にわたって恐縮であるが、将来への展望台を提供するためには、前段のウォーミングアップが必要であろうが、それにしても「横浜市域図」など、天眼鏡でみても、さっぱりわからぬ小ささである。べつに印刷技術が拙劣ともみえず、あまりにも体裁を考えた編集の罪であろう。

つぎに飛鳥田市長提案の目標、すなわち、

- (1)住宅都市
- (2)工業都市
- (3)港湾都市
- (4)国際文化管理都市
- (5)土地利用の合理化

と列挙されているが、これらは、なにも飛鳥田市長の発明発見でもなければ、いまさらとくに市民に提案せねばならぬほど、すぐれたアイデアでもない。ただ、(4)国際文化管理都市という字句が、われわれに聞きなれない新造語であって、奇異に

感ぜられるだけである。

最後の段の「建設」の項については、

- (1)都心地区整備計画
- (2)富岡、金沢地先埋立計画
- (3)港北ニュータウン計画
- (4)都市高速度鉄道建設計画
- (5)都市高速道路網建設計画
- (6)横浜ベイブリッジ建設計画

と六つの大きな事業をかかっている。

これらは、もちろん、計画それ自体としても、また実現するのならなおさらのこと、市政将来の重要課題であるから、とくと市民に提案すべきことは当然である。

だが、ここにいておきたいことは、市民に提案することとまったく同じ効果を認められている横浜市議会において、これらはすでに今年3月の予算市会中、全員協議会を開催して、市長、当局が説明し、諮って了解ずみのものである。

そして、いずれの計画一つをとりあげても、数百億円ないし数千億円台の大事業であり、現在の横浜市財政規模、財政状態では夢物語にひとしいものばかりである。

所詮、飛鳥田ビジョンといわれるもの、すなわちこれであろうか。

政治を行なう以上、ビジョンもなくてはならぬ。目標はつねに高くもつべきである。しかしそれは現時点において、焦眉の急務とされる施策の公約と並行して、かたられるべきである。

たとえば、本牧埠頭の建設と、本牧接収解除跡地の具体的建設開発計画、横浜市の心臓部的中心街との交通上のネックとなっている三菱ドックの処理問題、冬でも蠅や蚊に悩まされている関内・関外地区における下水道施設は、いつ、いかなる方法で建設がすすめられるのか……等々。

こうした、いま、市民が日常生活で困っているささいなとはいえない問題のとらえ方について、横

浜市政の責任者である飛鳥田市長は、はたして前向きで取組んでいるのかどうか。このような具体的、誠実なレポートこそ、市民が最も聞きたがっていることと私は考えるのである。

10年先の夢もまことに結構である。が、同時に、今晚、明朝の確実な約束をぜひ聞いておきたいということこそが、市民の心境ではなかろうか。それゆえにこそ、この「横浜の都市づくり」においては、こうしたナマの市政生態についての報告、対策のはなしが、もっと、もっと、内容の過半を占めるべきであった。

4

最後に、いま一度総括的に「横浜の都市づくり」をとらえてみよう。

近ごろ私は、飛鳥田市長が、その重要施策の2本の柱の一つとして打ちだした「だれでも住みたくなる都市づくり」が、いわば、ある種の「ユートピア」物語に近いような気がしてならないのである。知ってのとおり、トーマス・モアのユートピアは、現実の基礎を有しない、理想的な国家や社会秩序に関する空想的な所説を意味している。だからといって、「横浜の都市づくり」もユートピア的な空想小説の類であっては断じてないのである。

おもうに、行政とは、いかなるささいなことでも、生きた現実をとらえて処理することといわなければならないはずである。だからこそ、目標といい、あるいは計画といい、それは決して上演不可能なドラマの脚本であってはならない。

はなはだ遺憾ながら、飛鳥田ビジョンには、かような、いわゆる“レーゼ・ドラマ”の要素が絶無とはいえないのである。

あえていえば、願わくば、あまり選挙用のドラマを書き過ぎないでいただきたい。そして、民主政

治の法則によって、横浜市政をまかせられた以上、市長は大いに有言にして、しかも実行する業績の成果をあげてもらいたいものである。

そして、最後に、「横浜の都市づくり」の“あとがき”でものべているように、「大都市自治にふさわしい行政権限と財政力の拡大が必要です」という一節は、私も、立場は自民党でも、一市会議員として思いはまったく同じである。「市民の手による横浜の未来の都市づくり」をしなければならぬこともまったく同感である。

ただ、「都市の自治意識」については、西欧の多くのものが古い歴史と伝統をもつ都市国家の発展段階から、今日、住民自治、あるいは市民自治として完成されているものであって、いま、われわれがこれにあこがれても、わが国の地方自治体の発生過程をおもえば、それとこれとは、まったく相異った都市問題の立場であることを認識せねばなるまい。

西欧の伝統的自治意識と、わが国のタナボタ式地方自治意識の落差が、飛鳥田市長の力説する地方自治の諸問題に黒い影を投げかけているのは事実であろう。

そういう観点から、都市住民の自治意識の昂揚というか、市民としての自覚の涵養こそが、今後大いに必要にして欠くべからざる都市問題解決の前提であり、核心であることとするならば、せっかく、できあがった今次の「横浜の都市づくり—市民がつくる横浜の未来—」なるレポートを、かような社会教育の教材としてもっとも妥当、適切に活用されるよう願ってやまないのである。

<自民党市会議員>